様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　５月２８日現在

機関番号：８２１０５
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１７３０４３９
研究課題名（和文）　森林資源の利用とネットワーク・ダイナミクス

研究課題名（英文）　Use of forest resources and related network dynamics

研究代表者
林　雅秀（HAYASHI　MASAHIDE）
独立行政法人森林総合研究所・東北支所・主任研究員
研究者番号：３０３５３８１６

研究成果の概要（和文）：本研究では生漆生産者と漆木植栽農家の行動と、彼らが有する社会的ネットワークとの関連について、昭和初期からの歴史的経緯をふまえて検討した。その結果、生漆生産行動と漆木植栽行動に社会的ネットワークが影響していたことが明らかとなった。また、有賀（1966）が重厚なモノグラフによって明らかにした大家族制度にも、漆器生産の影響があることが明らかになりつつある。

研究成果の概要（英文）：In this study, the relationship between behaviors of lacquer producers and farmers planting urushi trees for additional income and their social networks was investigated based on the historical background from the early Showa era. As a result, it was revealed the social network have affected behaviors of lacquer production and urushi planting. Also, it is becoming clear that the large family system which has been revealed by a great monograph of Aruga(1966) was affected by lacquer ware production.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	800,000	240,000	1,040,000
２０１０年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：社会学
科研費の分科・細目：地域社会・村落・都市
キーワード：森林資源、社会的ネットワーク

１．研究開始当初の背景

過疎化・高齢化が進行する山間地域においては、現存する多くの森林資源を持続的かつ効果的に利用して地域社会の活性化を図ることが重要である。岩手県二戸市浄法寺地区で行われている生漆生産も森林資源を利用して地域社会の活性化を図ろうとする取り組みの一つである。同地区における国産漆生産は国内生産量の６割に達するものの、国内における生漆使用量の 95%以上は安価な中国産漆に占められており、同地区での生産量も年々減少してきている。このため、いかにして生漆生産のパフォーマンスを高めるかが地域活性化にとっての重要な課題の１つと考えられる。

応募者は、本課題に先行する課題での調査

のなかで、当時、生漆生産にとって重要な 2 つの環境変動が発生したことが分かった。一つは、2007 年頃から文化財修復のための大量の需要が発生したため、2008 年には価格が前年までの 1.5 倍以上に高騰し、生漆が不足する事態が発生した。生産者 1 人あたりの生産量には限界があるため、生産者数の増加とともに生漆の生産量が増加した。このため、漆木資源が不足する事態への不安が高まっていた。もう一つは、岩手県が中心となって国産漆認証制度が 2008 年から導入されつつあった。生漆の価格は国産と中国産とで 10 倍近い価格差があるものの、国産漆であることを証明することは容易ではなかったため、生漆を利用する漆器生産者の間で品質や価格の妥当性に対する不信感があった。このため、認証制度は需要者が国産漆を安心して利用するための制度として機能することが期待された。

２．研究の目的

本研究は第一に、上述の生漆需要急増に伴う生産量の増加と認証制度の導入という 2 つの大きな環境変動発生後の生漆生産者をめぐる社会的ネットワークを調査に基づいて把握する。

第二に、社会的ネットワークの変化に伴う規範、制度、および信頼の変動や生成を実証的に明らかにする。生漆生産者は漆木所有者から漆木を購入し、購入した漆木から漆掻きを行って生漆を生産し、生漆生産組合、仲買人、漆器生産者等に生漆を販売している。さらに生漆生産組合は文化財修復関係者や漆器生産者に、また仲買人は漆精製業者や漆器生産者等に生漆を販売している。こうした取引を前提に、文化財のための生漆需要の急増に対応して持続的に資源を利用していくためには、物理的な資源量の増大を図ることとともに、適正な利用のための制度や規範の生成が重要な役割を果たすと考えられる。もし、生漆生産者が無秩序な競争を行えば、資源が急速に劣化することが危惧されるからである。また、認証制度の導入は生漆を利用する漆器生産者や文化財修復関係者に、国産漆であることの信頼を与えることになると考えられる。こうした信頼によって、安定的な国産漆需要をもたらす可能性がある。

第三に、上述の社会的ネットワークの変化とそれに伴う制度・規範・信頼の変化・生成が漆資源の持続的利用というパフォーマンスに対して与える影響について考察する。その際、(1) 漆木資源が不足に陥ることなく持続的に利用されるための社会的なしくみが用意されるかどうか、(2) 生産者の高齢化に対処して新規の担い手を確保・育成するしくみが生まれるかどうか、(3) 漆の販売先を失うことなく継続的な需要を確保できるかどうか、などといった点からパフォーマンスが評価されることになる。

第四に、理論研究として、Ostrom らのゲーム理論によるモデルを基礎とし、限られた人的資源を前提としてモデルを構築し、持続的資源利用が可能となる条件を抽出する。第一から第三の実証的研究と理論研究との整合性について検討を行い、今後の研究の指針を得る。

３．研究の方法

(1)インタビュー調査の方法

主に生漆生産者と漆木所有者を対象にインタビューを行い、社会的ネットワークの変化と規範・制度・信頼などの変動や生成の様子を把握する。主な調査項目は、生漆生産者に対しては、生漆の生産方法・技術・生産量および情報交換、漆木所有者や漆器生産者との取引関係（取引の継続性）、漆木の購入元や生漆販売先に関する情報交換、地域の社会関係（寄り合い、手伝い、まつり等への参加）、漆木所有者に対しては、漆木の保有本数や育成方法および情報交換、生漆生産者との取引関係（取引の継続性）、地域の社会関係（寄り合い、手伝い、まつり等への参加）などである。

(2) 分析方法

インタビュー調査よって把握された社会的ネットワークの変動とそれに伴う制度・規範・信頼の変化・生成が資源の持続的利用というパフォーマンスにどのように影響しているかについて分析を行う。その上で、実証的研究から得られた知見と理論的考察との整合性について検討する。

４．研究成果

(1) 2009 年度の成果

生漆生産者を対象とした社会的ネットワークと資源利用に関する調査のための予備的調査・検討を行った。とくに、生漆生産者らが関係している農山村の社会構造を明らかにすることと、ウルシ木所有者のウルシ木育成や販売の意思決定要因を解明することを目的として、予備的調査・検討を行った。

農山村における社会構造解明に関しては、岩手県北部の村落構造に関する古典的な文献の精読と現地での聞き取り調査を進めた。これまでに、集落内の本家・分家関係には単一の本家が存在する場合や複数の本家が存在する場合など様々なケースがあること、組織の機能によって集落内で形成される組織と集落を超えて形成される組織が存在すること、本家・分家関係および集落の組織ともに時代によって変化してきていることなどを確認することができた。ウルシ木所有者の意思決定要因に関しては、岩手県二戸市におけるウルシ木所有者を対象とした聞き取り

調査を行った。これまでに、雑穀や豆類を栽培する必要性が薄れていくなどウルシ木植栽の背景に変化があったこと、ウルシ木を販売する場合に本家・分家関係を通して行われる場合とそうでない場合が存在することなどを確認することができた。

(2)2010 年度の成果

岩手県内を主な対象地として，生漆および漆器生産のパフォーマンスと生産に関わる人々の社会的ネットワークとの関連について調査を進めた。具体的には，1）過去に漆木を植栽した農家をおもな対象として，漆木植栽の経緯，漆苗木の当時の入手方法，植栽後の管理方法，植栽当時の土地利用等について聞き取り調査を行った。2）その結果，漆木そのものの生産性の変化のほかに，雑穀やタバコなどの漆以外の作物の生産性や生産条件の変化や，地域の就労条件の変化によって，漆木育成の経済・社会条件が変化してきていることが明らかになりつつある。3）また，調査を進めるなかで，1980 年代から 90 年代にかけて，この地域の多くの農家が漆木を積極的に植栽したことによって，現在の漆木資源の維持に結びついていることが，次第に明らかになりつつある。そこで，今後，この時期の漆木植栽に関わった関係者への聞き取り調査をさらに進める予定である。4）この地域の 1930 年代における家と家との間の様々な社会関係，漆器を含む経済活動等について調査した記録資料を入手した。そこでこの資料の解読作業を進め，その一部を公表する準備を進めた。

今年度の調査を通して，漆木資源管理・利用のパフォーマンスとネットワークの変動との連関について検討するための材料がおおむね揃ったため，次年度は理論を踏まえて，両者の連関について分析を行う予定とした。

(3)2011 年度の成果

1）昨年度までに実施した生漆生産者ならびに漆木植栽農家を対象とした調査に基づいて、生漆生産者や漆木植栽農家の行動と彼らのネットワークとの関連を分析した。この分析を通じて，戦後，日本中の生漆産地が生産を中止したり，生産量を大きく減少させていった中で，岩手県北地方において生漆生産が持続的に行われてきた条件を検討した。昭和初期から現在までを通観すると、漆木が多く植栽される地域は時期によって変化していったと考えられ、そうした変化には自治体独自の政策の影響や中心的な人物がもつネットワークの影響があったと考えられた。

2）昨年度までに実施した生漆生産者を対象とした調査データに基づいて，生漆に関する情報のあり方の変化が，生漆生産者と生漆購入者との関係変化をもたらすことに関して，ゲーム理論的な検討を行った。これまでのところ、生漆の認証制度の創設やインターネットなどによる生漆の価格や品質についての情報流通のあり方が変化したことが、生漆生産者の行動を変化させた可能性があると考えられた。

1）岩手県北地方の昭和初期の漆器生産と社会関係に関する資料の解読を進めた。この資料は、経済史家の土屋喬雄が同地域の S 家について有賀喜左衛門らと共同で調査した際の調査ノートである。S 家の大家族制度については有賀によって重厚なモノグラフが著されているものの、有賀のモノグラフでは S 家の生産に関する事柄には触れられていない。そのため、本資料の解読により、大屋、別家および名子によって構成される大家族制度の典型とされた地域において、漆器生産などの山村に特有の生産活動が果たしていた役割が明らかになりつつある。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 13 件）

①八巻一成・庄子康・林雅秀、自然資源管理のガバナンス、林業経済研究、査読有り、57(3)、2-11、2011 年

②林雅秀・岡裕泰・田中亘、森林所有者の意思決定と社会関係、林業経済研究、査読有り、57(2)、9-20、2011 年

③林雅秀、シイタケ農家の被災、林業経済、査読無し、65(5)、20-22、2011 年

④三須田善暢・林雅秀（他 3 名、2 番目）、土屋喬雄の石神調査ノート(一)：アチックミューゼアムによる石神調査の再考に向けて、八幡平市博物館研究紀要、査読無し、2、29-37、2011 年

⑤庄司知恵子・林雅秀（他 3 名、2 番目）、土屋喬雄の石神調査ノート(二)：アチックミューゼアムによる石神調査の再考に向けて、総合政策、査読無し、13(1)、55-71、2011 年

⑥堀野眞一・柴田銃江・林雅秀、シカは天然資源、フォレストウィンズ、査読無し、47、1-2、2011 年

⑦林雅秀・天野智将、素材生産業者のネットワークが森林管理に与える影響、社会学評論、査読有り、61(1)、2-18、2010 年

⑧田中亘・山本伸幸・林雅秀、林業経営統計からみた林家の経営動向、森林応用研究、査読有り、19(1)、9-16、2010 年

⑨林雅秀・三須田善暢・庄司知恵子・高橋正也、地域の文化の発掘：歴史に埋もれた漆器生産、フォレストウィンズ、査読無し、42、1-2、2010 年

⑩三須田善暢・林雅秀（他 3 名、2 番目）、石

神と煙山の現在:日本農村社会学における古典的モノグラフの調査地再訪、岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集、査読無し、12、47-52、2010 年

⑪高橋正也・比屋根哲・林雅秀、社会ネットワーク分析による農山村集落の今後を担うリーダーの構造、林業経済研究、査読有り、55(2)、33-43、2009 年

⑫Nishizono Tomohiro、Hayashi Masahide（他 8 名、6 番目）、Long-term age-related changes in stand volume growth for Japanese cedar forests in Akita district, northeastern Japan 、Proceedings of International conference on multipurpose forest management, strategies for sustainability in a climatic change era、査読無し、63、2009 年

⑬西園朋広・林雅秀（他 3 名、2 番目）、下内沢人工林収穫試験地および男鹿山人工林収穫試験地における定期調査の概要、森林総合研究所東北支所年報、査読無し、50、28-30、2009 年

〔学会発表〕（計 11 件）

①林雅秀・松浦俊也・吉良洋輔、共有林の利用と部外者入山ルール、第 123 回日本森林学会大会、2012 年 3 月 28 日、宇都宮大学（宇都宮市）

②八巻一成・林雅秀（他 9 名、5 番目）、岩手県葛巻町における地域振興と人的ネットワークの役割:町政の展開と人的ネットワークの概要、林業経済学会秋季大会、2011 年 11 月 12 日、信州大学（南箕輪村）

③比屋根哲・林雅秀（他 9 名、5 番目）、岩手県葛巻町における地域振興と人的ネットワークの役割:自治会組織の成立過程と活動実態、林業経済学会秋季大会、2011 年 11 月 12 日、信州大学（南箕輪村）

④八巻一成・庄子康・林雅秀、希少資源管理のガバナンス、林業経済学会秋季大会、2010 年 11 月 21 日、鹿児島大学（鹿児島市）

⑤金澤悠介・林雅秀（他 3 名、2 番目）、入会林野管理の計量社会学的研究、日本社会学会報告要旨集、83、2010 年 11 月 6 日、名古屋大学（名古屋市）

⑥田中亘・林雅秀（他 3 名、2 番目）、森林所有者の伐採と更新に関する将来意向:和歌山県におけるアンケート調査から、日本森林学会関西支部大会研究発表要旨集、30:60、2009 年 10 月 16 日、徳島大学（徳島市）

⑦八巻一成・庄子康・林雅秀、絶滅危惧種の保全をめぐる地域社会ーレブンアツモリソウを事例にー、林業経済学会秋季大会、2009 年 9 月 27 日、東京農業大学オホーツクキャンパス（網走市）

⑧高橋正也・比屋根哲・林雅秀、農山村集落住民が有する社会ネットワーク構造、林業経済学会秋季大会、2009 年 9 月 27 日、東京農業大学オホーツクキャンパス（網走市）

⑨ Hayashi, M. 、 T. Amano 、 Effects of networks composed of loggers and forest owners on forest management 、 15th International Symposium on Society and Resource Management in Wien、2009 年 7 月 8 日、Wien Austria Center (Vienna)

⑩Yamaki, K.・Y. Shoji・M. Hayashi、Social network structure in Rebun Lady-slipper conservation 、 15th International Symposium on Society and Resource Management in Wien、2009 年 7 月 6 日、Wien Austria Center (Vienna)

⑪内海裕太・林雅秀（他 4 名、2 番目）、社会的ジレンマの観点から見た入会地の管理、第 47 回数理社会学会大会、2009 年 3 月 7 日、京都産業大学（京都市）

〔図書〕（計 2 件）

①林雅秀、秋田県における山林所有者への影響と評価、森林総合研究所編『山・里の恵みと山村振興』日本林業調査会：166-174、2011 年

②林雅秀、林家、森林大百科事典：378-388、2009 年

６．研究組織

(1)研究代表者

林　雅秀（HAYASHI　MASAHIDE）
独立行政法人森林総合研究所・東北支所・主任研究員
研究者番号：30353816